二〇一九年七月二日

おがさわら丸

小笠原諸島は、北から聟島（むこじま）列島、父島列島、母島列島、硫黄（火山）列島で構成される。この他に南鳥島（コーカス島）、沖ノ鳥島、そして近年の火山活動で面積を拡げている西之島を含む。このうち人が住むのは父島と母島、硫黄島、南鳥島の四島である。ただし、硫黄島と南鳥島は自衛隊員や気象庁、国交省の職員が駐屯するだけで一般人は住んでいない。

主島である父島は東京から約一〇〇〇キロメートル離れている。父島への交通手段は小笠原海運が運航する「おがさわら丸」（一一〇三五トン）だけだ。「おがさわら丸」は概ね週一便通っており、所要時間は約二四時間である。父島に三泊して東京に戻る。つまり船中二泊、現地三泊の五泊六日の旅程となる。乗船した「おがさわら丸」は第三代目で、二〇一六年七月に就航した新鋭船だ。父島航路の定期船の歴史を振り返っておこう。

後述するように小笠原諸島は一九六八年にアメリカから返還された。翌年に小笠原海運㈱が設立され、一九七二年四月より定期運航が始まる。当初の船舶は東海汽船㈱から傭船した「椿丸」（一〇一六トン）といい、東京港と父島の間は約四四時間を要した。翌一九七三年に関西汽船の「浮島丸」を購入して「父島丸」と改称し、所要時間は約三八時間に短縮された。大学同期で都庁に就職した堤清樹さんは一九七三年四月から小笠原支庁に勤務しているが、彼が書いた小論によると、この「父島丸」に乗って父島に赴任している。

その後、一九七九年四月に初代「おがさわら丸」（三五五三トン）が就航し、一九九七年三月から二代目「おが

父島二見港に停泊中のおがさわら丸

さわら丸」（六七〇〇トン）を経て、現在の三代目に至っている。代を重ねるごとに船は大きくなり、かつ所要時間も短縮されてきた。

「おがさわら丸」は七層に分かれている。下層ほど運賃は安い。私は和室エコノミーだったので最下層の二デッキ、二一七号室であった。室といっても壁で部屋が仕切られているわけではなく、七人が寝るスペースが確保されているだけで、枕とマットが用意されている。

三デッキは和室エコノミークラスであるが、部屋は少し大きい。四デッキがエントランスになっており、案内所、レストランが置かれ、和室エコノミーと二等寝台の船室になる。五デッキは特二等寝台、一等スタンダード、二等寝台の各船室があり、六デッキは「ショップドルフィン」という売店、一等寝台、特一等・デラックスの船室、さらに七デッキは特一等と特等室（スイート）になり、展望ラウンジが設けられている。六、七デッキからは外に出ることができ、八デッキは甲板が広がる。

「おがさわら丸」は竹芝桟橋を一一時に出発した。この便は年に一度の硫黄島クルーズが組まれているため超満員で、定員いっぱいの八九四人が乗船していた。梅雨前線の影響で竹芝桟橋を出る時からどんよりと曇っている。昼食はレストランでカレーライスを食べ、茄子をつまみに生ビールを飲む。部屋では寝るか、寝ながら本を読むか、のどちらかしかないので、航海中の昼間は展望ラウンジで過ごすことが多かった。パソコンを持ち込み、小笠原の資料を読みながらメモをとる。飽きて来ると船内を歩きまわり、デッキに出た。

東京湾を出て御蔵島あたりに来ると、海上には白波が立ち、船は大きく揺れ始めた。三宅島も御蔵島も海抜五〇メートル付近より上は厚い雲に覆われている。揺れが激しくなったので気分はすぐれない。夕食は小笠原特産のカジキが特別メニューで提供されていたのでこれを注文、昼間に続いて生ビールを飲む。二四時間の航海だから食事はなるべく美味しい方がいい。伊豆諸島やトカラ列島を巡るフェリーの食事に比べると、この船のレストランは格

が上だ。

二〇一九年七月三日

朝食はラウンジで手づくりのハムサンドとサラダを食べ、コーヒーを飲む。ラウンジは二人の女性で営業しているが、けっこう気のきいた軽食類が多い。九時ごろになり船内放送が、聟島列島がみえてきたことを告げた。六と七デッキで船内スタッフによる解説が始まったので、ラウンジから外に出た。

聟島列島は主島の聟島（二・五六平方キロメートル）、媒島（なこうどじま）（一・三七平方キロメートル）、嫁島（〇・八五平方キロメートル）など大小合わせて八二の島からなる。現在はいずれの島も無人島であるが、聟島と嫁島には戦前まで人が住んでいた。

▲ラウンジの朝食
▼聟島列島の主島・聟島

聟島列島

聟島には一八八一（明治一四）年に佃島の田中鶴吉が移住し、牧場を始めている。一八八七（明治二〇）年には五人の牧夫を雇い、牛三五頭、羊四〇数頭、山羊三〇〇余頭、この他に豚も放牧していたという。その後、一八九〇（明治二三）年に茨城県那珂湊出身の岩崎亀五郎が事業を継承する。亀五郎は一九三八（昭和一三）年九月に七三歳で没しているが、入植以来四八年間牧畜一筋で過ごしたようだ。当初、牛はサトウキビを搾るための役牛として需要があったが、羊や山羊は父島や母島の経済的発展によって増えた食肉の需要に

応えたものであった。その後、牛は食肉として需要が増えた。これらの家畜類は父島の関谷商店におろしていたという（『小笠原』特集第五八号）。

戦争中の強制疎開によって聟島は無人島になったが、二〇〇八年からアホウドリの移住作戦の舞台となっている。この移住作戦は（公財）山階鳥類研究所によって進められている。一九九一年から鳥島で始まったアホウドリデコイ（おとりの模型）作戦によってアホウドリが復活（二〇一八年春には七〇八羽のヒナが育ち、個体数は三〇年で一〇倍以上に増えた）しているが、この鳥島のアホウドリのヒナをヘリコプターで聟島に移送し、新たな繁殖地を増やそうとの試みである。これまでの一〇年間の試みで約半数のヒナの帰還を確認しているが、定着し繁殖したのは二個体だけで、現時点では試行錯誤が続いている（山階鳥類研究所ホームページ）。

当初、聟島列島の島々は霧の中に隠れていたが、徐々に霧が晴れてきて、列島を構成する五つの島影を確認できた。船の周りにはきわめて多くの海鳥が乱舞している。海鳥が船についてくるのは、船の進行に驚いて飛び出してくるトビウオを狙っているとのことだ。

小笠原村役場

「おがさわら丸」は一〇分遅れて、一一時一〇分に父島二見港に着岸した。

父島は面積二三・八〇平方キロメートル、周囲五二・〇キロメートルで、父島列島の主島である。小笠原諸島の中では硫黄島に次いで大きい（硫黄島は年々隆起しており、面積が拡大、現時点では父島を超えている）。父島列島は兄島（七・八八平方キロメートル）、弟島（五・二〇平方キロメートル）の他に大小七二の島々で構成される。

船客待合所は船を降りた観光客と出迎えの人でごった返していた。この日の夜、再び「おがさわら丸」に乗船して硫黄列島に向かうので、荷物は船会社が預かってくれる。道路を挟んだ対面の倉庫にバックパックを預け、小笠原村役場に向かう。海岸沿いのメインストリートには生協やスーパーの店舗、飲食店、宿泊施設などが並ぶ。しばらく西に進むとＪＡの直売所があった。

店内をのぞくと、マンゴー、バナナ、パッションフルーツ、パパイヤなどの南国の果物が売られている。船が入港しないと客はいないから入港した客目当てに朝方入荷したものと思われる。また、「小笠原自然塩」「小笠原の塩」「小笠原島塩」という三つのブランドの塩が売られていた。高校の同級生で神奈川県の県会議員をしていた岩本さんが小笠原で塩を作っている知り合いがいると言っていたが三軒あるとは意外だった。手荷物になるから何も買わず、パッションフルーツのジュースをその場で飲んだ。ところが製造地は北海道になっている。店の人に聞くと、小笠原に加工場がないためだという。それにしてもわざわざ北海道まで原料を運び、製品を送って来るわけだから、輸送費だけでもばかにならない。通常サイズの飲料缶が三二四円もしたのはこのためだった。

直売所の先に大神山公園があり、その対面に小笠原村役場が建つ。戦後、米軍の統治下に置かれていたが、一九六八年に小笠原諸島が返還されると、同時に小笠原村が設置された。その後、一九七九年に村長及び村議会議員選挙が実施され、名実ともに村政が確立している。

▲ＪＡ直売所で売られている果物類
▼小笠原村役場の建物

総務課で村勢要覧と字の区分図をいただき、村民課で直近の人口と世帯数を聞く。七月一日現在の父島の人口は二一五八人、世帯数は一二一八戸で、島民の多くは港背後の清瀬、奥村、東町の集落に住む。外国人世帯は二二戸、小笠原の特徴でもある混合国籍世帯は八戸である。なお、高齢化率は一四・三パーセントであり、わが国の平均よりも低い。ちなみに二〇一五年国勢調査時の人口は二〇八九人、世帯数は一一一九戸であった。産業別就業者数のうち農業は五〇人、漁業は五三人で、一次産業就業者の割合は一割にも満たず、サ

ービス業が圧倒的に多い。

ところで父島の人口は入植以来増加の一途を辿り、四〇〇〇人を超えるまでになっていた。一九四四（昭和一九）年四月時点における父島の強制疎開の対象人口は四三四八人であり、このうち四八七人が軍属などで島に残留している。敗戦後、父島の人口はゼロになったが、一部の外国人については一九四七年に父島への帰還が認められて一二九人が帰島した。返還時の人口（一九六八年六月）は一八一人であったが、帰島促進で人口が増加し、一九七五年には一三五六人となる。その後、旧島民（戦前に住んでいた人）に加え、新島民（戦後移住した人）、新々島民（四、五年前に移住した人）といわれる人々が加わり、近年の人口は二〇〇〇人強で推移している。

ビジターセンター

大神山公園の隣に東京都が指定管理を委託する小笠原ビジターセンターが置かれている。小笠原の歴史、文化、自然を紹介した施設で、一九八八年に開設された。館内は歴史コーナー、自然・動物コーナー、ビデオコーナー、閲覧コーナーに分かれている。ビデオコーナーでは一五、六本あるビデオライブラリーから選んで観ることができる。ちょうど「小笠原の歴史」が上映されていた。ビデオと資料をもとに簡単に小笠原の歴史を振り返っておこう。

通説では、小笠原諸島は信州松本深志の城主・小笠原貞頼が発見したとされ、小笠原の地名は彼に由来するとされているが、どうやらこの話は史実ではないようだ。一七二〇年代に小笠原貞頼の曽孫だと自称する小笠原貞任（さだとう）を名乗る人物が、貞頼が一五九三（文禄元）年に現在の小笠原諸島にあたる無人島群を発見、「父島」「母島」などの島名をつけた文書記録を所持しているとし、小笠原諸島への渡航と開発を幕府に申請した。しかし幕府の調査によってこの人物は貞頼の曽孫ではなく、貞任という名は偽名で、文書も偽書だと判明したため、幕府から重い処分を受けている。

後述するように幕府は「無人島」の領有・入植事業を開始するため水野忠徳を団長とする官吏団を咸臨丸で父島に派遣するが、この時に大学頭・林昇に命じて、一六世紀末に小笠原貞頼が「無人島」を発見し「小笠原島」と

名づけたという記録を提出させている。つまり幕府は欧米諸外国に対して「無人島」の領有権を主張するために、かつて自ら否定したはずの小笠原貞頼発見説や「父島」「母島」といった呼称を利用したというのが真相のようだ。かくして「小笠原」という地名が定着したのだった。

この小笠原諸島を最初に発見したのは日本人であった。一六七〇（寛文六）年に、阿波の国・浅川浦のミカン運搬船が、和歌山でミカンを積み、江戸に向かう途中で遭難して漂流、母島に漂着した。乗組員六人はカメと魚を食べて生き残り、船を作って八丈島を経由して伊豆半島の下田に戻った。幕府はミカン船の乗組員からの報告に基づき、五年後の一六七五（延宝三）年に島谷市左衛門ら三二人を小笠原諸島に派遣し、現地を調査させている。船は唐船を模倣した大型船で全長は四〇メートルを越えた。この時は三六日間に亘って父島、母島などの主な島を探検している。その際、「此の島大日本の内地」と書いたものを現地に設置した祠（ほこら）に入れたという。そして父島を北ノ島、母島を南ノ島と名付けた。

ビジターセンターにあるビロウの葉でつくられた開拓当時の家

その後、無人島時代が続いていたが、一八二〇年ごろに日本近海でマッコウクジラが発見され、欧米の捕鯨船の活動領域が北西太平洋に及ぶようになると、大型帆船の停泊が可能な父島や母島は寄港地としての重要性が高まった。そして一八二三（文政六）年九月に英国ブリストルの捕鯨船トランジェット号が初めて母島に停泊した。続いて一八二七（文政一〇）年にイギリス海軍の探検調査船ブロッサム号がこの無人島に到着、艦長ビーチーはイギリス領を宣言する。翌年にはロシアの探検調査船セニャーヴィン号が二見湾に来航している。

このように一九世紀に入ると鯨資源を求めて欧米各国が小笠原海域にやってくるようになり、小笠原諸島は捕鯨船の補給基地として注目されるようになった。

こうした中、一八三〇（天保元）年にサンドウィッチ諸島（ハワイ）から五人の欧米人と二〇人のハワイ人が移住した。欧米人は、マテオ・マザロ（イタリア